
彼女の名は愛

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の名は愛

【Nコード】

N2094N

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

二一四号室の彼女は気難しそうです。

（前書き）

彼女は主人公の一人になるでしょうか。
そのつもりなのですが。

どこに行くのだろう。

二一四号室の部屋に住む女性。いつも静かでテレビの音が聞こえてはくるけど、話声は聞こえない。電話もかかってこないようだ。新築のアパートでまだ入って二週間。彼女は仕事をしているようで、朝はアパート内で誰よりも早い。

ときどき廊下の掃除をしてくれるので、木島はすみませんと声も掛けるけど、無視されることが多い。気まぐれな人なのか。それとも、知らない人とは話さないのか。

二一五号室は大学四年生の木島紀仁。隣は笹山と書いてある。トントン。木島の部屋を誰かが叩く。

「はい」

彼女が立っている。黙って渡される回覧板。

「ああ、どうも」

彼女は頭を下げて帰ろうとする。彼は自己紹介をしようと声を掛けた。

「あのう」

まただ。無視されてドアが閉まった。可愛い顔をしてるのに、無愛想すぎると木島はふくれている。

回覧板には最近痴漢が現れてるから、十分注意するようにと大家からの伝言だった。回覧板を戻すために大家のところへ出かけた。

「ごめんください」

「はい」

「回覧板、僕で終わりなので持ってきました」

「どうも。男の方も気を付けてくださいね」

「はい。あの、隣の笹山さんですけど、どんな人ですか」

「どうして？」

「挨拶しても返事が返ってこないから、気難しいのかと思って」

「ああ、違うのよ。耳が聞こえないの」

「えっ？」

「うん、子どものときに高熱が続いて、小学校入学までは聞こえていたらしいんだけど。段々聴力が落ちてしまつて今は聞こえないんですって。入居する時にお母さんから聞いたのよ」

「そうなんですか。知らなくて。僕、失礼なことしてしまつたかもしれない」

「あの、話をする時はゆっくり顔を見てあげてね。唇を読んで理解することができそうよ。私もそのこと言つたの忘れていたわ。本当にごめんなさいね」

彼は後悔した。彼女に後ろから話しかけてばかりだった。掃除してくれた時も礼を言つたのを背中からした。さっきだつてそうだ。自分のことばかり考えて腹を立てていた。

木島は田舎から小包が来たことを思い出した。母の作つたジャガイモと玉ねぎ。少しおすそ分けしようと袋に入れた。

トントン。

ドアを叩いて、はつとした。これでは気づかない。ケータイの蓋を開けたり閉めたり。小さな台所の窓に向けてやってみた。

ガチャ。ドアが開いた。

「あの、僕の家から送ってきたものです。どうぞ、おすそわけです」なるべくゆっくり話した。彼女はにっこり笑つて顔の前で右手を前に倒した。口はありがとうを言つてるようだった。手話なのか。すると、彼女はペンとメモ帳を持ってきて『笹山愛』と書いてよろしくと頭を下げた。彼も『木島紀仁』と書いた。

彼女はそれを読んでにっこり笑った。

「僕は大学四年生」

彼がゆっくり話すと、彼女は近所の図書館の視聴覚ライブラリーで働いていると書いた。

二人は筆談で静かに楽しく話した。

その日から、彼女が帰つて来る時には、彼は階段を上がる音です

ぐ分かるから、ドアを開けて

「お帰り」

と、声を掛けた。彼女はやがて、ドアにスイッチを付けた。それを押すと呼び鈴代わりに電気がついた。

メルアドも交換した。二人はいつもメールで話すことができた。

彼女は彼より二つ年上だったが、小柄なためか若く見えた。

まっ黒いストレートな長い髪をバレッタで留めていた。目が大きく近視の縁なしの眼鏡を掛けていて、コンタクトは怖くて嫌と書いていた。彼は大学で濃い化粧の同級生をたくさん見ていたから、彼女がとても新鮮に見えたようだ。

次の土曜日に近所で花火大会があるので、彼は彼女を誘うことにした。

「一緒に行かない？」

彼女は頷いて笑った。二人にとって初めてのデートなんだから、彼は新しいＴシャツを買うことにした。彼女は仕事が済んで一度家に戻ってから、待ち合わせの駅に来るという話だった。

彼は普段より少し高いユニクロではないＴシャツを買った。早速デパートのトイレで着替えた。なかなか似合うと鏡の前で胸を張ってみた。

彼女はメールで今から家に帰ると伝えてきた。

「そのまま来たら？」

急かすようなメールを送ると、彼女から返事は来なかった。

彼女がどんな格好で来るかなと彼はワクワクしていた。約束の間から十分過ぎ、二十分過ぎても来ない。

彼女の帰宅時間はいつも定時だったから遅いと不安になった。ふと、回覧板を思い出した。

彼は慌てて走り出した。

痴漢が来たらどうしようと思っただけで、彼は大声を出したい気持ちになった。

彼女の部屋の電気はついていていた。

もうとつくに着替えて出発しているはずなのに、まだいるなんておかしいと彼は震えた。

彼の心臓がドキドキと早鐘のように打っている。恐怖心を消すかのようにダンダンと音を立てて階段を駆け上がり、スイッチを押す。出ない。気ばかりが焦って、彼はドアをドンドンと叩いた。

ガチャ。

出てきた。

「愛」

彼女は浴衣と格闘していた。汗まみれになって。アップにした髪から滝のような汗。帯がわき腹で止まっている。汗でひっついて、前で結んだ帯が後ろに回ってくれないようだ。初めて着たの是一目でわかった。

水に溶けないはずのマスカラも黒く垂れていた。

彼はあまりにもホツとして泣きそうな気持ちだった。

でも、口から出てくるのは腹の底からの大きな笑い声。

彼女は遅くなってしまったと目に涙をいっぱいためているが、わき腹で文庫帯は止まっている。

その姿も笑えるし、安堵感で彼は思わず力いっぱい彼女を抱きしめた。

ぐっしりと汗で濡れている彼女は驚いていたが、やがて、おずおずと彼の背中に手を廻してきた。

お互い汗でぐしょぐしょになったけれど、二人は時間が止まったように感じた。

「行く？ 花火大会」

彼は彼女の帯を後ろに回してあげた。

彼女は笑いながら頷いた。

彼がこの日のために覚えた手話。右手で優しく左手の甲を撫でるように回し、彼女を指さした。

「あいし てる きみ を」

みるみるうちに、彼女の大きな瞳から涙がこぼれた。

二人はしばらく抱き合って、初めてのキスをした。彼女は泣きながらキスをしたから、彼の唇に彼女の鼻水までついた。

ハンカチを出してぬぐおうとする彼女。

だが、幸せな彼は気にも留めず、二人は手を取り合って既に始まっている花火大会に急いだ。

夜空に光る大輪の花火、この音が聞こえなくても、二人の瞳は同じものを見ている。

「愛」

小さな声で彼が呟いたのに、彼女は彼をやさしく見つめた。

そして、彼を指さし、右手で左手の甲を撫でながら回した。

その手を握る彼。

「僕もだよ」

花火の大きな音を気にすることなく、恋人たちは見つめ合いながら指で愛を語ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2094n/>

彼女の名は愛

2010年10月8日14時28分発行